

平成 21 年 6 月 11 日現在

研究種目：基盤研究(G)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19520309
 研究課題名（和文） 中国語文化圏における厨川白村著作の受容の再燃現象についての研究
 研究課題名（英文） Research on the Revival Phenomenon of Reception of the Kuriyagawa Hakuson' s Writings in the Chinese-Speaking Region.
 研究代表者
 工藤 貴正 (KUDO TAKAMASA)
 愛知県立大学・外国語学部・教授
 研究者番号：80205096

研究成果の概要：

厨川白村著作が及ぼした影響について、中国語圏(大陸・中国、台湾、香港)全体を視野に入れて考察、分析したものであり、一度衰退した大陸に対し、台湾では新しい翻訳者を獲得して、継続して普及した原因と方法を考察した。さらに、中国における厨川白村著作の回帰と再評価の特徴が、単に西洋の「近代化」を導入するための道具としてあったばかりでなく、マルクス主義・社会主義芸術論の浸透により、厨川白村文芸論は文芸心理学と文芸社会学の合流・結合がなされた文芸理論として高く評価され、「厨川白村研究」「厨川白村文芸思想研究」という新しい語彙と領域が出現していることを提示した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：中国近現代文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国近現代文学、厨川白村現象、大陸・中国、台湾、香港、再評価と継続的評価、厨川白村文芸思想研究

1. 研究開始当初の背景

本研究に先立ち、中国 1920、30 年代に流行した厨川白村著作の人気ぶりを分析した数篇の論文を書き上げ、「民国文壇における厨川白村現象」と名付けて、図書を刊行するつもりでいた。ところが、その後の調査により、この人気は台湾にも存在し、1970 年代にピークを迎え、1980 年代以降は大陸・中国に回帰し、香港では一部の研究者が系統的に厨川白村を研究していることが判明した。そこで、1980 年代以降の中国での再評価の原因と、台湾における厨川白村著作普及の現状とそ

の要因、及び香港における状況を分析することが必要であった。

2. 研究の目的

本研究は、1920 年代半ばからおよそ 10 年に亘り、日本留学経験者によって中国語に翻訳されることで広く普及した厨川白村の著作が、1980 年代以降、特に 1992 年春節の「南巡講話」以降、中国・台湾・香港で再び受容されている現状について、その意義を究明することを目的とする。さらに、厨川白村という日本人が、中国語圏ではかなり高い評価を

受けていることを広く周知させるために、1920年代から現在に至る『中国語圏における厨川白村現象』と題して、図書を刊行することを目的とする。

3. 研究の方法

中国は、上海図書館、同済・復旦大学図書館において、台湾は、台湾中央研究院図書館(中国文哲研究所図書館・傅斯年図書館)・台湾大学図書館において、香港は、香港大学図書館、香港中文大学図書館において、所蔵する翻訳版厨川白村著作と厨川白村に関わる論文及び厨川白村に関わる『文学概論』の書籍を調査し、必要な全て資料をコピーし、帰国後に精読し、それぞれの状況を分析する。

4. 研究成果

本研究は、厨川白村が及ぼした影響について、中国語圏(大陸・中国、台湾、香港)全体を視野に入れて考察、分析したものであり、台湾と香港における考察は、初めてのものであり、国内外に与えるインパクトは大きい。また、中国における厨川白村著作の回帰と再評価の特徴が、単に西洋の「近代化」を導入するための道具としてあったばかりでなく、マルクス主義・社会主義芸術論の浸透により、厨川白村文芸論は文芸心理学と文芸社会学との合流・結合がなされた文芸理論として高く評価され、「厨川白村研究」「厨川白村文芸思想研究」という新しい語彙と領域が出現していることを提示したことも、国内外に与えるインパクトはかなり大きい。この研究成果は、厨川白村という日本人が、中国語圏ではかなり高い評価を受けていることを広く周知させると共に、この成果を先行研究として、若い研究者が新たな論文のテーマを探し出すことが可能な展望を望める。また、2009年度科学研究費補助金の援助を得て、今までに成し遂げた成果と今回の成果を併せ、『中国語圏における厨川白村現象—隆盛・衰退・回帰と継続』(思文閣出版、2009年12月予定)として出版し、研究成果を広く一般の人々へも公開できることとなった。

英文のタイトルと各章の内容は以下の通りである。

The “Kuriyagawa Hakuson Phenomenon” in the Chinese-Speaking Region: The Rise, Decline and Regeneration of His Reception in Mainland China, and the Continuation of His Popularity in Taiwan.

序章 「中国語圏における“厨川白村現象”とは何か」

1920年代、30年代の民国文壇で、1950年代以降今日まで台湾において、1980年代以降はまた、大陸・中国に回帰して今日まで、厨川白村の著作が、それぞれ時代とそれぞれ地域の特性を条件に生き続けてきたことを述べた。

第一章「厨川白村著作の普及と評価—日本での評価の考察を中心に」

中国での中華民国期における厨川白村ブームの理由を解明するために、新聞各社の書評と文芸雑誌での一次資料の評価を示した。好い評価の理由に、本格的な概説書、卓越した文明批評論と美文調の白村文体を挙げ、悪い評価の理由に、各論での専門性の欠如、中途半端は社会活動性、罵倒録のような表現を挙げていることを指摘した。

第二章「民国文壇の知識人の厨川白村著作への反応」

1920年代、30年代の中国において、厨川白村の著作は合計で9作あるが、その中死後刊行物の『最近英詩概論』以外の8作品が、11の翻訳作品となって翻訳・出版されている。そこで、その翻訳作品について解説した。また、創造社の成員である田漢、鄭伯奇、郭沫若の受容経過を示し、翻訳者の中から、魯迅、夏丐尊、劉大杰の翻訳の意義について分析した。

第三章「『近代の恋愛観』の受容を巡る訳者三人の差異」

民国期において厨川白村著『近代の恋愛観』が翻訳者たちの翻訳意図や目的の違いにより、呉覺農訳「近代的恋愛観」は、1921年1月からの『婦女雑誌』の革新が呼応し、恋愛・結婚・性教育問題などの新しい知識の普及をめざす編集方針に相応しい作品として、任白濤訳の2種の『恋愛論』は、エレン・ケイ、カーペンター諸氏の学説の紹介をしている西洋近代の恋愛論の「指南書」として、夏丐尊訳『近代的恋愛観』は、魯迅、劉大杰の白村著作の翻訳意図とも関連づけ、また葉靈鳳の白村文体への好評を例に、日本と同じ悪

癖・同病に悩む中国人の国民性問題の批判とそれを伝えるに相応しい白村流のエッセイ風の表現に価値を見出して受容されていたことを分析した。

第四章「魯迅訳・豊子愷訳『苦悶的象徴』の産出とその周縁」

魯迅訳『苦悶的象徴』と豊子愷訳『苦悶的象徴』が出版されるまでを比較検討した。魯迅訳『苦悶的象徴』は計12版まで総数24,000冊以上を発行した。この数字は翻訳書としては破格の量で、まさにベストセラーといえる。背景には、表紙の装幀と附録にモーパッサン『頸かざり』を収録するなどし、商業ベースでの普及を目指した魯迅のこだわりがある。また、『苦悶的象徴』と『象牙の塔を出て』などの魯迅作品を手がけることで急成長した北新書局を例に、近代出版産業の形成の過程を示した。

第五章「翻訳文体に顕れた厨川白村—魯迅訳・豊子愷訳『苦悶的象徴』を中心に」

葉靈鳳に代表される日本語を解さない知識人がなぜ厨川文体に高い評価を下したのかを解明することを目的とした論考である。魯迅、豊子愷等の翻訳者たちに共通する傾向として、厨川文体の持つ美しさ、リズムの良さを写し撮ろうとしていることを分析した。また、台湾、謂わば「継続する民国文壇」で初めて「魯迅」という実名で出版された魯迅訳『苦悶的象徴』の編集者陳荊苓が、「厨川白村の平易で親しみやすい筆づかい」を「魯迅の実直にして精緻な訳文」に著されたと書いているのは正鵠を射た評価であること、更に、厨川は「文芸思潮を深く掘り下げながらも解り易く探究した」という評価が、中国語圏の知識人が厨川白村著作に与えた普遍的な評価といえるだろうことを提示した。

第六章「ある中学教師の『文学概論』—本間久雄『新文学概論』と厨川白村『苦悶的象徴』『象牙の塔を出て』の普及」

一人の無名の浙江省立第十中学校教師王耘荘の著した『文学概論』を例に、民国文壇における西洋近代文学理論の普及が、本間久雄『新文学概論』と厨川白村『苦悶的象徴』

『象牙の塔を出て』や小泉八雲の文芸論などの日本知識人が著した文学概論書を基礎に展開されていたことを提示した。王耘荘『文学概論』は、章節などの形式的には本間久雄の『新文学概論』が利用するが、本質的な文学論には厨川白村・魯迅訳『苦悶的象徴』『出了象牙之塔』を使用していることを示し、本書は20年代後半の中国文壇における日本知識人の果たした近代西洋文芸論の受容状況をパノラマ的に映し出していることを提示した。

第七章「『近代の恋愛観』に描く恋愛論の文芸界への波及・展開—ビョルンソンとシュニッツラーの翻訳状況を例に」

日本ではビョルンソンとシュニッツラーの評価にさほど差がないのに、中国では初めての紹介者であった茅盾のビョルンソン評価が低く、鄭振鐸のシュニッツラーが高かったこと、そこから派生して、任白濤訳、厨川白村著『近代の恋愛観』では、シュニッツラーの恋愛劇は高く評価されるのに、ビョルンソンの紹介は近代文芸において重要なテーマである「三角関係」を扱ったものとして名前すら失った形で、テーマ論へと転化されていることを提示した。

第八章「台湾における厨川白村—継続的普及の背景・要因・方法」

大陸・中国の民国文壇では、魯迅が『壁下訳叢・小引』(1929.4初版)において、厨川白村の文芸観は「比較的古い論拠」と位置づけて以来、プロレタリア文芸論が最先端の新しい理論となり、本格的な厨川白村受容の最終は、許欽文著『文学概論』(1936.4初版)であることを提示した。一方、継続する民国文壇、即ち台湾では、その後も、厨川白村著作の翻訳出版は繰り返されると同時に、その文芸観は高く評価され、各種「文学概論」の教科書では「引用されるテキスト」になっていることを示した。また、香港でも、魯迅訳『苦悶的象徴』『出了象牙之塔』(1960年8月第1版)が、香港・今代図書公司から出版されているが、知識人たちが一定程度以上認知されるのは、大陸での厨川白村の再受容の傾向に呼応して各大学図書館に所蔵された北

京・人民文学出版社の魯迅訳『苦悶的象徴』
『出了象牙之塔』(1988年7月)以降であることを示した。

終章「回帰した厨川白村著作とその研究の意義」

1980年代は「走向世界」をキーワードに、「魯迅与厨川白村」に代表されるような比較文学の研究手法から、1990年代は「現代性」をキーワードに、西洋近代文芸思潮との係わりから、2000年代は「民族」「伝統」「現代性」との関わりから、厨川白村著作は再受容され始めた。そこで、民国時期の受容の意義と比べて、80年代の傾向、90年代の傾向、2000年代の傾向はそれぞれどのように違うのかまた同じなのかを分析して、厨川白村著作の受容の意義について提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①工藤貴正、魯迅訳・豊子愷訳『苦悶的象徴』の産出とその周縁、愛知県立大学外国語学部紀要、査読無、(言語・文学編)40号、2008年、323～350頁

②工藤貴正、台湾における厨川白村—継続的普及の背景・要因・方法、愛知県立大学外国語学部紀要、査読無、(言語・文学編)41号、2009年、297～318頁

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

①工藤貴正、東方書店、南調北調論集、翻訳文体に顕れた厨川白村—魯迅訳・豊子愷訳『苦悶的象徴』を中心に、2007年、1083～1114頁

②工藤貴正、汲古書院、魯迅と西洋近代文芸思潮、2008年、430頁

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

○書評 (計 3 件)

①工藤貴正、代田智明著「魯迅における“復

讐”と“終末” —魯迅研究に対する雑感」、
『野草』80号、2007年、108～110頁

②工藤貴正、「じそん」を懸けた研究—丸山昇：魯迅の眼を通して20世紀の「革命文学」と「社会主義」を回顧する、『野草』81号、2008年、137～140頁

③ 工藤貴正、山田敬三著『魯迅 自覚なき実存』—「本質」としての実存主義的思考と生きざま、『東方』334号、2009年、29～32頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 貴正 (KUDO TAKAMASA)
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号: 80205096

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし